

農業ふれあい公園だより

No.26

2019
(平成31年)
MARCH

【岩手県立農業ふれあい公園 農業科学博物館】 岩手県北上市飯豊 3-110 TEL 0197-68-3975



春

ヤマボウシ

農業ふれあい公園は、桜の丘や芝生の広場、ひょうたん池、棚田などが園内にあり、子ども達の遠足や家族のレクリエーションの場としてご利用いただけます。公園の広さは約17畝(東京ドームの約3.6倍)ととても広く、3万本を超える様々な樹木があり、春にはコブシ、オオヤマザクラ、ハクモクレンが、夏にはナツツバキ、アベリア、秋にはジュウガツザクラやマユミなどが咲き、春から秋まで楽しむことができます。

また、樹木に囲まれた散策路もあり、多くの方々にご利用いただいています。



夏

シモツケ



秋



冬

公園内には岩手の農業を知ることができる農業科学博物館が設置されています。館内には「農業れきし館」と「農業かがく館」の二つの展示室があり、農業れきし館では、かつての農家の暮らしと農作業用具の展示、県内各地の農業と食文化、農業の歴史などを紹介しています。農業かがく館では、田んぼの中の世界や、野菜や果物の由来が分かる巨大な冷蔵庫、牛の体のしくみなどについて楽しく学べるコーナーなどがあります。

毎年多くの小学生や園児が校外学習や遠足などで訪れており、最近ではデイサービスの皆さんの外出時の立ち寄り先としてもご利用いただいています。



企画展



ふれあい広場



農業かがく館



農業れきし館



農業かがく館

…農業科学博物館・ふれあい公園トピックス…

親子体験学習会「そばを作って食べてみよう」 平成30年7月29日～11月4日 4回講座



まどりで脱穀



石臼で挽く



そば打ち

そばの種まきから刈り取り、昔の農具を使って脱穀や粉ひき・そば打ちまでを体験

「農の生け花展」 平成30年9月8日



季節の農作物や山野草を、身近な農具を器にして

おカイコさんが来館
平成30年7月末～9月末



カイコに触れてみよう！

「一日子ども研究員」平成30年8月7日



ふれあい公園の昆虫で標本作り

「レトロ発動機展」平成30年9月8日



「ドットドット」懐かしの発動機を披露

親子体験学習会「しめ飾りをつくろう」

平成30年12月16日



親子で縄ないに挑戦



完成したしめ飾りに満足

お知らせ

◆◆◆ 博物館ご利用案内 ◆◆◆

- 【開館時間】 9：00 ～ 16：30（入館は16時まで）
- 【休館日】 毎週月曜日（ただし祝日の場合は翌日）
年末年始（12月29日～1月3日）
- 【入館料】 高校生まで無料
個人 学生140円 / 一般300円
団体（20名以上）学生70円 / 一般140円
障害者手帳などの交付を受けている方及び介護サービス事業などで入館される方は、入館料が無料になります。

第80回企画展「物をはかる」（仮称）

開催期間 2019年4月7日（日）～6月27日（木）



約80坪のスペースがあります

多目的ホールを無料で貸し出していますので
作品展示や活動発表会などにお使い下さい。
希望される場合は、農業科学博物館までご相談下さい。

平成30年度企画展レポート

第76回 『昔の肥やしと使い方』

平成30年4月8日(日)～ 6月28日(木)

～肥培管理～

現代の作物栽培は作物に適した肥料設計により化学肥料が施され栽培されていますが、化学肥料がなかった昔は、焼畑耕作により自然にある草木を焼いた肥料や、家畜を飼うことにより生じた厩肥、生活の中で得た下肥(人糞尿)、草木灰など、自給的な材料を肥料としていました。

近世には肥料の扱い方を解説する『耕作噺(陸奥)』(中村喜時 1776年作)や、軽米町における農耕法の『軽邑耕作鈔』(淵澤園右衛門 1847年～1862年作)があり、凶作や飢饉への対応を背景にした畑作農書となっています。

企画展では、藩制時代に書かれた『軽邑耕作鈔』の穀物栽培における作業の時期的管理法と、この時代から昭和30年代まで続いていた厩肥と下肥を組み合わせた肥やしの施肥法を紹介しました。



ひりょうおけ
肥料桶



み ちみ
箕・籾とおし



だつけもっこ うまやごえうんぼん
駄付 畚 による 厩肥 運搬



ボッタ播きの準備

第77回 『絹を生む虫“おカイコさん”』

平成30年7月6日(金)～ 9月29日(土)

～日本の近代化に貢献した養蚕～

日本が近代国家への道を歩みだした明治維新から数えて、今年には150年目になります。当時輸出品として外貨を獲得していたのは生糸と絹製品でした。明治政府は養蚕を奨励し、日本は世界一の絹生産国になりました。日本が開国し諸外国との交易が始まった1859(安政6)年から1933(昭和8)年までの75年間、生糸は日本の輸出総額の約4割を占めていました。これほど長く輸出品第1位の座を保持した産品は日本の歴史上生糸以外はありません。

本県では、養蚕は米に次ぐ大きな収入源として、1940(昭和15)年には4割の農家が養蚕を経営にとり入れていました。蚕の飼育は、多くの労働力と細かな心遣いが必要で、また天候や気温などの変化で繭の収量が大きく左右されるため、農家は飼育方法を工夫し、蚕具の改良に取り組んできました。

企画展では、養蚕の歴史と飼育の仕方、使用した蚕具について紹介しました。



きいと まゆ
生糸と繭



くわ かいこ
桑を食べる 蚕



回転まぶし



まぶし折機

第78回 『しぼって採った油と蠟』

平成30年10月10日(水)～12月27日(木)

むかしの岩手では、灯りや食用の油を採る油料作物として、ナタネ、エゴマ、ゴマが栽培されており、特にナタネは県南部を中心に広く栽培され、春は野菜として、油の搾り粕は肥料としても使われていました。

一方、山間高冷地における油料作物は、江戸時代後期の軽米町周辺の畑作について記された『軽邑耕作鈔』に、エゴマの栽培方法が記述されていることから、エゴマが中心であったと思われます。

昭和中期以降、栽培された油料作物から自家用油を搾る際は、専門の業者に加工を委ねていましたが、それ以前の搾油は、楔式搾油機や棒状式搾油機などを用い人力で行われていました。

企画展では、強大な圧力をかけて油を搾る楔式搾油機などの道具とその作業工程、搾った油や蠟の活用方法と、先人の技と知恵を紹介しました。



くさびしきさくゆき
楔式搾油機



ぼうじょうしきさくゆき
棒状式搾油機



おきあんどん
置行灯



つるし油皿
吊し油皿

第79回 『まゆ』から『糸を繰る』

平成31年1月11日(金)～3月30日(土)

～日本の近代化に貢献した製糸とシルクの特性～

江戸時代から、県内の養蚕農家は上質なまゆは商人に売り、残った規格外のまゆを使って布を織り、生活に使用してきました。

このように養蚕農家が行っていた手仕事が地方の文化と融合して独自の発展をとげ、全国に特色ある絹産地ができ、岩手にも南部紬や千厩紬などの紬産地ができました。

養蚕の歴史と蚕具を紹介した第77回企画展に引き続き、企画展では、養蚕農家が“まゆ”から“糸”を繰るために使用した道具と、糸繰り技術やシルクの特性について紹介しました。



ぎくき
座繰り器



まわたが
真綿掛けと真綿



いと
糸 枠



足踏み式座繰り器



きぬ
絹ベそ



なんぶつむぎ
南部紬